

## 文学博士長澤信壽君の「アウグスティヌス哲学の研究」に対する授

### 賞審査要旨

本書の著者長澤信壽君は、かねて古代ギリシア哲学と中世カトリック神学との間に思想的連続性の認められる事実に特に注意を払い、兩時代の間において媒介的連鎖の位置を占める思想家としてアウグスティヌスの人物と思想との研究に志し、その浩瀚なラテン文著作、特に彼の初期の哲学的論文の原典について、精密な文献学的思想史的研鑽に努めていたが、ここにその業績をまとめて整理論述したのが本書である。アウグスティヌスに関する研究は近世初期以来すこぶる夥多に上るが、やや以前のものはほとんどすべて教會的神学の観点から教義学の根拠を求め、ために行なわれ、近時になっては彼の人格形成に興味を感じ、もしくは一般思想史乃至社会史的観点による論述に重点を置く傾向が著しいようであつた。しかるに長澤君は純粹に哲学史家の立場から彼の思想的發展を問題史的に追及し、彼がギリシア哲学の影響を受けながらキリスト教的信仰に準拠して批判解釈を加え、双方の相互關係と媒介的調整によつて新しい哲学的理解に到達し得た思索の跡を辿りその分析解明を試みたのは、特色ある研究とするに足りる。

長澤君が本書において取り上げようとした主題は大體において次の二点に絞られるように見える。第一には、アウグスティヌスが最初ヘレニズム期の哲学を學んで真理認識への愛の心を点火されつつも、やがて懷疑思想に捉われ、悩み苦しむ、ようやく回心によつて暗黒から救われることを得たときに、思想的には新プラトーン学派の哲学の影響を強く受けた。しかしその際に、彼は如何にして懷疑説を克服し信仰の立場に辿り着くことを得たか、如何にその

信仰の確實性を論証したか、さらにまたそこから如何にして神の存在の論証に達し得たかという問題に直面したが、それは要するに彼の認識論的問題の探究に帰する。第二には、あらゆる真理の根源としての神は我々の知解の対象として認められるべきであるが、神は単に知性によっては完全にではなく信仰によらなければ把握されないもので、ここに知解と信仰との関係が問題とされなければならない。この問題は宗教哲学的に究明され、しかも単にアウグスティヌスの初期の著作を發達史的にはなく、彼の全生涯にわたる主要な論著に基づいて理論的体系的に論述され、彼の哲学体系の組織的構造が問題とされざるを得なくなる。

以上の二課題に対応して本書の内容もおのずから二部に分かれる。著者は章節の別によってこれを明記してはいないが、全篇七章のうち、はじめの三章は第一の問題の解明に当てられ、これに続く四乃至六の三章は第二の問題の考察を目的とし、最後の章には付説の趣きがある。以下その要点を検討しよう。

本書第一章は「懐疑の克服」と題し、彼の最初の著“*Conta Academicos*”および“*Soliloquia*”等を主材料として回心前後における精神的動揺と新しい認識論的立場への戦いとを描き、アカデミア学派の懐疑説を鋭く批判反駁したことを論述する。第二章「至福なる生の概念とその認識論的基礎」は彼の第二著“*De beata vita*”およびその他に基づき、懐疑の克服によって我を知り、その「生」が至福なる所以を明らかにし、もつこととその反対としての「欠乏」との対立に対して基準(modus)としての「知慧」(*sapientia*)の眞理性を解説する。第三章は「確實性」の論で、以上の考察の一応のまとめとして、懐疑の克服と至福なる生の認識とから「我を知る」との自己意識に基づいて認識の確實性の拠って立つ所以を示し、主として彼の初期の著作により「生」は「知」と一致しまた「知」は実践的性格を有すること

を注意し、「自己の内に帰れ」という彼の認識論的原理を説明し、また懷疑それ自身の中に疑いを超越した生の事実の前提されていることを指摘した箇所を引用して、デカルトの認識論における確実性の説と比較対照し、『De libero arbitrio』等について「存在する」「生きる」「知る」の三階段をあげ、この基本的確実性が神の存在の論証に役立つというアウグステイヌスの立場を説述する。

第二の問題に移って第四章「神と真理」には、前章における自己確実の内面性の原理に続いて、生の事実を認識する理性の問題に進み、理性はさらにこれを超えてその規範となる永遠の真理そのものに達し、その認識としての「知慧」を解明する。しかしこの真理の概念はもはやギリシア的ではなくキリスト教化され、人格性を有する神の信仰と媒介相即の上に立つところのものであるという。しかし媒介相即とは何か。これを解くのが第五章「知性と信仰の問題」である。この場合知性と信仰とが神を対象とするに当たりいずれが他に先立って優位を占めるかというに、最高善を時間的生の中に求めるギリシア哲学は知性を重んずるが、知性をもっては神を完全に知解することはできず、理性が信仰によって浄められなければならない。そこでアウグステイヌスは立場の転換を迫られ信仰に頼らざるを得なくなったが、彼にその機会を供したのは取りもなおさず罪悪の意識であり、これを通して神の恩寵の経験に達したことを強調する。

かくて神の認識に関して、知性の先行する場合と信仰の先行する場合との二つの道が考えられるが、前者の場合も知性が信仰に背くのではなく、後者にも信仰が盲目的ではなしに理性が「内的な眼」となって信仰に方向を暗示する。その意味で両者の関係が相互媒介的なのである。しかしその関係がさらに組み合わせられると循環的媒介が成立

する。そして知解の作用は信仰を中間に挟んで二段階をなし、前段階は理性による信仰の準備として *scientia* と、後段階は既得の信仰内容の知解であって *sapientia* と呼ばれる。この序列は第三の道として考えられる。けれどもこれと共に信仰も知解を中間に挟んで二段階に分かれ、一は信仰に「眼」があるといわれる場合の「眼をもつ信仰」であり、他は最初の信仰とこれに対して対自的関係をなす知性とを止揚して再び自己に帰還する即自且対自の信仰であって第四の道をなす。著者はこの両者を *credere* と *credere in* との用語法の差異によって区別し得るといふが、とにかく真の信仰は後者で、それは実践的に神の業に参与する信仰であり、「愛による創造」、パウロのいう「愛によって働く信仰」である。この第三および第四の道は、知性と信仰との相互循環性を有する結合で、知性が信仰に媒介されると共に信仰を自己に媒介し且つこれに連なっている故、非連続の連続である。ここに両者は相互媒介により無限の循環前進をなすといっている。

以上の結果アウグスティヌスの哲学概念が新しく性格づけられるのは必然である。それはもはやギリシア哲学におけるように理性的認識の学ではなく、信仰に基づきまたこれを含み、同時に信仰も知解と結びついてもはや単純な宗教形態ではなくなる。著者はこれをソクラテスと対比して、もはや「愛知」ではなく、「創造者の善」(*bonitas creatoris*)という目的が意識され神への信仰と愛とに帰せしめられているとなす。著者はさらにキリスト教的自然哲学の系譜を探り、アウグスティヌスがプラトーンに帰因を有しながらも彼のいう「知慧」は神を畏れる者の知慧、やがて *dietas* であり、そこに彼の哲学における実践的傾向の著しく、認識と愛との一致を強調する。終りに罪悪の問題に触れ、人間が可変的であって、神の「不断の創造」なしには無に帰せざるを得ないし、しかもこれが人間に必然的な

ことを説いて恩寵の神学に言及し、「哲学の目的は認識を超えて神の愛に到る」ことに存することを結論している。

第六章「内的人間と外的人間」と題し、この信仰の哲学における人間観がギリシア思想とも近世哲学とも異なり、神により創造された超自然的理性の認識において生きる宗教的人間の学であることを述べる。そこでは内的および外的人間の区別を立てるが、それは単なる心と身体との別とは相違し、内的人間は理性的で「神の影像」(imago Dei)であり、その力をもって身体を支配し、外的人間は神に背いて罪を犯す。その際アウグスティヌスは罪の原因を意志に帰するが、それは能作因(causa efficiens)ではなく無作因(causa deficiens)であるとし、罪を犯す人間は否定性をもつ存在として、無からの創造に基因する可変性に罪への可能性があり、そこに被造物性が存し、そのため罪への可能性は同時に必然性を暗示することを説き、原罪説に論及している。

しかるにこの原罪説はアウグスティヌスにはペラギウス一派との論争に際して展開された教説なので、著者は特に第七章にこの論争についての解説を付言している。しかしここには単に論争の歴史の経過を述べただけで、教義学的な論点に深入りしなかったのは遺憾であった。

要するに、本書はアウグスティヌスの思想全般にわたるものではなく、殊に罪および恩寵の問題について詳述せず、また「神の国」に関する歴史哲学の問題には立ち入って検討していない。しかし認識論的方法論から出発して宗教哲学に論及し、彼の哲学の概念と性格とを明らかにし思想上の位置を措定したことは、わが国哲学史学界において最初の研究であるばかりでなく、難解なラテン文著作を広く渉獵し且つ精密な文献学的解釈を試み、さらにその思想体系の構造を解明したことは、顕著な学問的業績といわなければならない。